

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02754

研究課題名(和文)類をなさない派生接辞の研究：英語のa-の定着・衰退・拡散

研究課題名(英文) A study of a derivational affix that is not a type: the prefix a- and its establishment, decline, and spread

研究代表者

長野 明子 (Nagano, Akiko)

東北大学・情報科学研究科・准教授

研究者番号：90407883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語の例外的派生接辞の文法と歴史について研究した。接頭辞a-は、他の接頭辞と類をなさない。現代英語には、a-以外で叙述専用形容詞を作り出すような接頭辞は存在しないからである。このようにある要素が他の大多数と違うふるまいを示す場合、その背景を理解することは、言語の規則とシステムの解明を目指す言語研究にとって重要な課題になる。成果は大きく3つある。第1に、前置詞が形容詞の形成に役立つことを示した。第2に、a-に関する従来の文法化分析は不十分なものであり、中英語期以降はむしろ語形成規則で新たな派生語が作られることを示した。第3に、日英語の言語接触におけるデータを開拓し、分析を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、例外性に目を向けることで逆にシステムの規則性を示したことにある。多くの言語理論は言語の規則的な側面に注目するが、語彙のようにそもそも固有性・個別性の高い領域では例外事象に注目することも有益な研究方法である。そのことを実証できた。本研究は、また、もともと計画していた、英語の中でのinとonの文法化の研究にとどまらず、これらの前置詞が日本語に借用されてやはり形容詞類を派生するようになったことにも目を向けた。そして、それが「語彙と言語接触」についての研究を開始する糸口となった。つまり、本研究は分野にとって新しい研究テーマを開拓することができたという点でも意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)： We examined the grammar and history of an exceptional derivational affix in English. The prefix "a-" found in words such as "asleep," "awake," and "aboard" is exceptional and does not form a class or type with other English prefixes. In present-day English, there is no other prefix that produces predicative-only adjectives. Understanding why a particular element behaves differently from the majority in this way is significant for linguistic descriptions and theories that aim to uncover the rules and systems of a language.

The major results of our investigation are threefold. First, adpositions (P) are instrumental in the creation of new adjectives. Second, the traditional grammaticalization analysis about "a-" is not sufficient. After the Middle English, new items began to be produced by a word-formation rule. Third, the locational prepositions "on" and "in" are involved in the production of new adjective-like predicates in contemporary Japanese through language borrowing.

研究分野：英語学、形態論、対照言語学

キーワード：派生形態論 文法化 生産性 語形成規則 言語接触

1. 研究開始当初の背景

英語形態論研究の第一人者である Laurie Bauer 氏は、“The importance of marginal productivity”と題する論文 (*SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 12:1, 2015) で、多くの研究は生産性の高いプロセスを対象とするが、実は細かい生産性を見せるプロセスの研究こそ、形態論という仕組みの働き方と可能性の範囲を特定する上で重要だと論じている。Bauer 氏の例は現代英語の派生接尾辞 -th、-i による複数名詞屈折、アブラウトによる動詞屈折であるが、本研究では、同じように低い生産性しか持たない派生接頭辞 a- (例: aboard, asleep, afire) に注目することにした。

接頭辞 a- は、通例「形容詞化接辞」に分類される (Marchand 1969, Quirk et al. 1985, Bauer et al. 2013)。しかし、よく見ると、派生形容詞の 2 大タイプである「性質形容詞類」とも「関係形容詞類」とも異なる性質を持つ形容詞を作り出すことがわかる (Beard 1995)。とりわけ、叙述用法でしか使えない形容詞を作り出すという点が顕著である。従来、そのような接辞の発生は、文文化の結果として説明されてきた。具体的には、場所の前置詞の on, in が作る前置詞句が徐々に文文化してできたのが、aboard のような語であるとされる。これは、例えば on the board > on board > aboard のような道筋になる。つまり、高頻度の on/in の PP (Prepositional Phrase) が文文化し、形態的には一語化、意味統語的には PredP (Predicative Phrase)・PathP (Path Phrase) 化したのである。

2. 研究の目的

1 節で論じたような背景のもと、本研究は、接頭辞 a- を「形容詞化派生形態論の例外的存在」と位置づけ、その文法と歴史について研究することにした。派生形態論研究としての本研究の新しさは、1 つの接辞を中心に据え、文法・歴史・言語接触 という異なる観点からその全体像を明らかにしようとした点である。これは、言語理論を中心に据え、その視点から接辞の特定側面だけを論じる大半の研究とは異なるやり方である。そうした包括的研究をすることによって、「類を成さない接辞」がいかに発生し、語形成要素として定着するかを解明することを目指した。また、一度はある程度の生産性を見せた接辞が、結局なぜ衰退したのかという点を問うことで、英語の派生形態論が「何を許さないか」を特定できるだろうと考えた。さらに、本研究は、英語の形容詞派生の研究にとって重要な下位論であるとの認識で研究に取り組んだ。つまり、形容詞化は名詞化・動詞化に比べ研究が遅れており、英語の派生形態論研究の最後の山であるといっている。その山においては、性質形容詞と関係形容詞がコアであり、a- (とその他少数の接辞) は周辺である。従って、本研究を完成させることによって、形容詞派生のコアについて議論する際に、もはや a- を見る必要がなくなるのである。

以上をまとめると、本研究は、接頭辞 a- 自体の例外性をよりよく理解することにとどまらず、英語の形容詞化派生形態論の規則性をよりよく理解することをも目的としたものであるといえる。

3. 研究の方法

本研究は、生成文法理論の考え方と諸概念を前提とし、そのなかで発達してきた形態理論、特に Mark Aronoff の形態理論と Robert Beard の形態理論を分析枠組みとして用いた。より個別的には、品詞論について Baker (2003) *Lexical Categories* (Cambridge UP) の理論を用い、文文化について生成文法系の「移動」を用いる理論を参照した。言語データは、主に Oxford English Dictionary Online と大型電子コーパスである British National Corpus と Wordbanks Online から収集した。

文献調査、コーパス等から集めた一次データ、言語理論を用いたデータの分析、以上の 3 つは言語学研究の通常的手法である。本研究では、これに加えて、日本の英語学研究を特徴づけるといってよい「日英語比較対照」の方法も採用した。

いかなる仮説を立て、それらがどのように実証されたかについては、下の 4 節で説明することにした。

4. 研究成果

ここでは本課題の研究成果を大きく3つに分けて説明する。接頭辞 a- をもつ形容詞を、以下「a-形容詞」と呼ぶことにする。

(1) 品詞論と文法化

まず、a-形容詞がなぜ常に叙述的形容詞としてふるまうのかを考えた。先行研究でわかっている史的な事実は、a- は場所の前置詞 on や in に由来するということである。そこで、これらの前置詞が作る前置詞句のうち、とりわけ頻度の高かった句、例えば on the board のような句が、品詞として PP から PredP に変化したという仮説を立てた。P(reposition) と Pred(icate) という機能範疇については Baker (2003) の前提に従う。そして、なぜ本来 P であった要素が Pred になったのかについては、統語構造上の移動によって文法化を捉える生成文法的考え方 (Robert and Roussou (2003), van Gelderen (2004)) をとればうまく説明できる。この仮説は、aboard のように、接頭辞から見ると「名詞に付加している」と分析することができる事例が初期に多数作られていることから実証することができた。

だが、この仮説は、aboard のような例がある一方で、awake や alive のように接頭辞から見ると「動詞や形容詞に付加している」事例もあるという事実については説明できない。実際、本研究のデータ収集によって、近代英語期になると、接頭辞 a- の基体 (base) は動詞中心になるということがわかった。しかも、近代英語期には、接頭辞 a- はそれ以前や現代英語に比べると高い生産性を誇っていたことがわかったのである。

そうだとすると、近代英語期には、a-形容詞は(上で見たような個々の前置詞句の文法化によるのではなく)語形成規則 (Aronoff 1976, 1994) によって派生されていた、と考えるほうが事実に即していることになるだろう。語形成規則分析ならば、動詞・形容詞→叙述形容詞という品詞の変化は、派生にみられる品詞変更の一種にすぎないことになる。

以上をまとめると、接頭辞 a- に注目することにより、「文法化の結果としての語の形成」と「語形成規則による語の形成」は区別する必要があることがわかった。先行研究には、aboard 類についての文法化分析しか見当たらないが、それでは片手落ちだったことが本研究により明らかになったのである。これについて、学会での研究発表と英語による査読付き論文発表を行った。

(2) 関係形容詞

2節で触れたように、a-形容詞は英語の形容詞体系のなかでは「例外的」な形態である。派生によって作られる形容詞として英語で「規則的」といえるのは、関係形容詞や性質形容詞とよばれる形態 (島村 2014) である。本研究の2つ目の成果は、そうした意味で a-形容詞と対立する関係形容詞についても詳細に検証し、日本語との対応まで視野に入れた分析方法を提案したことである。

まず、事実観察として、関係形容詞も前置詞と深く関係すること、しかしながら、この場合は場所の前置詞ではなく、of という、語彙的な意味をもたない純粋に機能的な前置詞との関係が密であることを明らかにした。観察のうちとりわけ重要だと思われるのは、関係形容詞は、of が作る前置詞句と統語的に相補分布を示すという事実である。つまり、関係形容詞は名詞を前から修飾する名詞前位の限定修飾用法しかもたないが、それは、名詞を後ろから修飾する用法では、対応する of 句に代替されてしまうからである。前置詞が of ではない under the tree のような前置詞句に対しても、空間・時間的接頭辞を伴う関係形容詞が存在していて、両者の間にやはり同じような統語上の相補分布が観察される。

観察された事実を説明する分析方法として、句構造の音声具現 (Beard 1995) という点に着目した。具体的には、前置詞句と関係形容詞は、同一の PP 構造が2つの異なる形をとって音声化されたものであるという分析を提案した。PP の句構造はほとんどの場合は of the wood, under the tree のような前置詞句の形をとって文中にでてくるが、唯一、名詞直接修飾 (direct modification) の環境においてのみ、関係形容詞という派生形容詞の形をとって表出する。それは、名詞を直接修飾する要素は、X⁰ レベルの要素でなければならないという独立した文法的制約がある (Sadler & Arnold 1994) ためである。

(1) で見た a-形容詞の分析と比較すると、関係形容詞は PP の文法化という通時的変化によってできたものではない。むしろ、PP が共時文法の要請によって通常とは異なる音声具現形式をとったもの、それが関係形容詞である。

以上のことは、関係形容詞を扱う先行研究にはないまったく新しい提案である。その知見について、学会での研究発表と論文発表を行った。

(3) 言語接触

3つ目の研究成果としては、「前置詞」「形容詞派生」をキーワードとして新しい研究領域を開拓したことが挙げられる。場所の前置詞は、英語の歴史の中で形容詞化接辞を生み出しただけでなく、現代日本語へと借用され、やはり語形成の要素として生産的に使われている。「リンスインシャンプー」「カスタードオン珈琲パン」における「イン」「オン」がその例であるが、これらの例からわかるように、日本語の中に取り込まれてもなお、in, on は名詞修飾要素を作り出している。

ただ、「リンスインシャンプー」が内部構造としては [[リンスイン]シャンプー] という構造をもち、「カスタードオン珈琲パン」が [[カスタードオン]珈琲パン] という構造をもつことからわかるように、in, on の前置詞としての統語的特徴は日本語には継承されていない。日本語の中では、「イン」「オン」は(その由来から予測される)接頭辞としてふるまうのではなく、むしろ、基体の末尾につく接尾辞的な要素としてふるまうのである。

この点以外にも、機能的要素(前置詞や接辞はその一種だが)が言語の壁を越えて移動する際には多くの難しい問題があることが次第にわかってきた。本研究課題の範囲内で行ったことは、

「リンスインシャンプー」類の言語理論を用いた分析と 言語接触がもたらす言語データを既存の形態理論の中でどのように扱うことができるかについての考察である。 についてはいくつかの学会で研究発表を行い、英語と日本語で論文を発表した。また、 については日本語で書いた概説書のなかに一章を設けて論じ、今後の研究の方向を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Nagano, Akiko	4. 巻 11
2. 論文標題 “ A conversion analysis of so-called coercion from relational to qualitative adjectives in English ”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Word Structure	6. 最初と最後の頁 185-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3366/word.2018.0124	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada,	4. 巻 15
2. 論文標題 “ Affix borrowing and structural borrowing in Japanese word-formation ”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SKASE Journal of Theoretical Linguistics	6. 最初と最後の頁 60-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Shimada, Masaharu and Akiko Nagano	4. 巻 23
2. 論文標題 “ Relational adjectives used predicatively (but not qualitatively): A comparative-structural approach ”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Lexique: Revue française de lexicologie et de linguistique	6. 最初と最後の頁 62-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 長野明子	4. 巻 89
2. 論文標題 英語の名詞由来派生形容詞の2種類について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本英文学会東北支部第71回大会プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 155-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nagano, Akiko	4. 巻 35
2. 論文標題 How do relational adjectives change into qualitative adjectives?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JELS35	6. 最初と最後の頁 273-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nagano, Akiko	4. 巻 9
2. 論文標題 "Are Relational Adjectives Possible Cross-linguistically?: The Case of Japanese"	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Word Structure	6. 最初と最後の頁 72-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3366/word.2016.0086	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nagano, Akiko	4. 巻 33
2. 論文標題 "The Category and Historical Development of the Prefix a-"	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 JELS 33 (Proceedings of the 33th National Conference of the English Linguistic Society of Japan)	6. 最初と最後の頁 86-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nagano, Akiko	4. 巻 35
2. 論文標題 "Morphological Realization of Focus Head in Hakata Japanese"	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長野明子	4. 巻 2
2. 論文標題 「平叙文末詞と疑問文末詞の対応関係について」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊	6. 最初と最後の頁 88-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada
2. 発表標題 “On two linguistic strategies of borrowing prepositions and particles”
3. 学会等名 Word-Formation Theories III/ Typology and Universals in Word-Formation IV (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada
2. 発表標題 “Ambiguities of existential-based V+V sequences in Standard and Fukuoka Japanese”
3. 学会等名 the 19th International Conference on Turkish Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nagano, Akiko
2. 発表標題 “Three distinctions in grammatical borrowing”
3. 学会等名 Symposium at the 36th Annual Meeting of the English Linguistic Society of Japan
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nagano, Akiko
2. 発表標題 How do relational adjectives change into qualitative adjectives?
3. 学会等名 ELSJ (The English Linguistic Society of Japan) 10th International Spring Forum (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada
2. 発表標題 A relational nominal structure in nominal predicates
3. 学会等名 Premier Symposium International de Morphologie (ISM0) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada
2. 発表標題 So-called wasei eigo as a case of morphostructural borrowing from English
3. 学会等名 Tsukuba Morphology Meeting 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「2種類の重複表現に関する形態論的考察」
3. 学会等名 日本語文法学会第18回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shimada, Masaharu and Akiko Nagano
2. 発表標題 “Attributive modification in depictives”
3. 学会等名 SLE 2016 (the Societas Linguistica Europaea) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Akiko, Nagano and Masaharu Shimada.
2. 発表標題 “Language contact between English and Japanese and the borrowing of left-headed nominal modification structure”
3. 学会等名 ESSE 13 (the European Society for the Study of English) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「英語の接頭辞a-の生産性の変化について」
3. 学会等名 東北大学ワークショップ『内省では得られない言語変化・変異の事実と言語理論』
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「言語使用の三層モデルと形態論」
3. 学会等名 筑波大学ワークショップ『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「英語の名詞由来派生形容詞の2種類について」
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第71回大会シンポジウム『動詞と形容詞の項構造・構文とレキシコン』
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 長野明子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 170-257
3. 書名 『言語研究と言語学の進展シリーズ第1巻 言語の構造と分析 統語論、音声学・音韻論、形態論 第III部 最新のレキシコンと形態論の進展』	

1. 著者名 長野明子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 27-54
3. 書名 「レキシコン理論の潮流：レキシコンでの操作としての借用について」影山太郎・岸本秀樹編『レキシコン研究の新たなアプローチ』内	

1. 著者名 長野明子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 63-86
3. 書名 「なぜiceは動詞としても使えるのか：現代英語の転換」米倉綽・中村芳久編『英語学が語るもの』内	

1. 著者名 長野明子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 77-93
3. 書名 「現代英語の派生接頭辞en-は本当にRHRの反例か？」	

1. 著者名 長野明子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 324-344
3. 書名 「博多方言の疑問文末詞の変異と変化の観察」	

1. 著者名 小川芳樹、長野明子、菊地朗	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 453
3. 書名 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』	

1. 著者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada.	4. 発行年 2016年
2. 出版社 Cambridge Scholars Publishing	5. 総ページ数 219-240
3. 書名 “How Poor Japanese Is in Adjectivizing Derivational Affixes and Why”	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----